

田植草紙全考注（朝哥の部）

—その一—

眞鍋昌弘

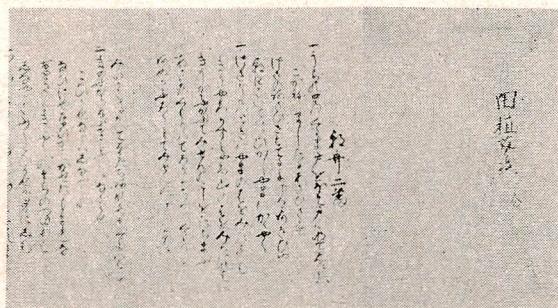
四四

はじめに

ここに、田植草紙系歌謡の中心である「田植草紙」（東京大学文学部国語研究室蔵影写）本田植草紙のこと。志田延義博士校注により日本古典文学大系『中世近世歌謡集』に収められた（写真参照）の簡単な注と考説を試みたいと思う。一応全部の歌をみることにし、今回はその第一回目で朝歌二番の1番～3番を取りあげる（歌謡番号は右記の大系において施されたものによる）。内容は各歌、〔注〕と〔考説〕に分けてみるが、両項のけじめはそれほど厳密なものではない。

一応「考説」では構成・背景・実体・観念や文芸としてのおもしろさ・美しさ、また問題点の多い語句などに少しでもふれて、総合的解釈に近づきたいと思う。

以後、本誌に朝歌の部を何回かにわたって載せさせていただくことにした。ただこれは愚考の一段階におけるメモで、至らぬ面が多いと思う。紙数の制限によりページにもかぎりがあつて、割愛せざるをえない所は甚だ多く、省略した部分にも興味ある問題点は残つてゐる。今後より精密に考察する機会を得たいと思つ



ている。（なお〔注〕のところでは田植歌本の本文の比較を行なつているが、多くを羅列することができないので、重要だとと思われたもの二二三にとどめた。なお、今後田植歌本は略称を用いる。補記参照。本文中では人名はすべて氏で統一した。おゆるしいいただきたい。）

また、この「田植草紙」と同原本から出たと思われるものに「東京大学史料編纂所蔵影写本」は言うに及ばず「日本歌謡集成本」・「久保豊松本田植哥草紙」（久枝秀夫氏のご厚意によつて知り得た）があるが、すべて朝歌一番が欠けてゐるか、さもなくば混乱している。

しかし周知のごとく他の狭義の田植草紙系歌謡の諸本からして、より適切な朝歌一番を補うことが可能である。今後必要であるので、ここにとりあげず「高松屋古本」のものを引用しておきたい。

朝うた老番

一、わさ□へを先さんはいニ参せう

一、うへ□いなずるひめニ参せう

一、さ□いハ今こそおりやれ宮の方から

あしけのこまニ手綱よりかけて

一、たすなよりかけ今山ばいハのろうた

一、あしけこまニハ山ばいのせていきませう

一、おもうとのごをまちてこぬよハな

□、うたやわかやよミてさらニねらばやな

□、おきてきいたかけさうつたいこのような

一、うたをよミてまたうやとのゝくるまで

一、をもうとのこの口すわぬ余ハな

こいニ／＼おもわれてこいとおもわれてな

一、けさもおきてハでうすの水とこわれた

一、でうす水ニハてやいのし水七おけ

一、しの□のミおりてねたる其よハな

こ□道をかたるとてさらニねらればや

一、うらめしよ明のからすはやなく

一、ねるとゆうてもまくらニ朝日のさつまで

一、しのふとのごかこたちねやニわすれた

朝哥二番

1 番

一うらの□のくるま戸をほそ戸に明て見たれハ

二かねにましたるあさひさす

三けさのあさひさもてるよけなあさひや

四朝日さいてはひかしやまにかゝやく

五〔注〕「田植草紙」はここから始つている（朝歌一番は右記

のもの参照）。全体が朝・昼・晩と三部に区分され、それぞれ

がまた一番から四番まである。他に「酒来る時之哥」「酒呑

うで後」「これよりあかり哥」の各グループが挿入されて

いる。この三部構成は一日の組織的田植歌としてごく自然

であり、狭義の田植草紙系歌謡における基本的なものであ

る。他に、大体のグループにまとめてその終りに「右の歌

何々時より内に歌申事也」などと注意書きするもの、卯の

時の歌からはじまつて巳・午・未などの時刻に区切つてゆ

くもの、あるいはナガレ（一種の物語を構成しているものや、

一つの主題のもとにうたわれる一聯の歌）で単位となつているもの、区分をしていないもの、などいろいろである。たゞ

まつぞ吉野へいざもどろく（ごもんかへり踊）

し田植草紙系歌謡における組織的構成についてはより詳しく述べる必要があると思われる所以、又筆を改めて後の機会にゆずりたいと思う。

（2）裏の口の車戸のところ、「背戸の車戸」（御哥雙紙、双紙、など）、「藏の口の車戸」（雜紙、哥写など）とも。田植草紙では欠けているが、朝歌一番の後半は夜の忍び歌（恋歌）になつていて、忍ぶ殿御の印象が強いのであつて、その雰囲気は「裏の口の」の語に受け継がれているようにおもわれる。思う殿御は裏口を通つて忍んだであろう。一方、千葉県・盆踊歌には

「こんど来るなら裏からござれ

表車戸で音がする（『日本歌謡集成』卷十二）

とも。また裏の口の「口」は、これも朝歌一番の「思う殿御の口吸はぬ夜はな」の「口」を思わせるが如何。車戸は古く建久八年撰『多武峯略記』・下巻・第二堂舎の項に「東西脇各在『開戸一具』。北方在『車戸一具』。」とある。開戸と対立せしめているので、いわゆる板戸の引戸で車をはめたものであつたことがわかる。ここもそれでよいであろう。

近世の民家には普通に見られた。後半は、戸を細く開けて

戸外を見ているさまであるが、「ほそニあけて見たれ」

（高松屋古本）「少しあけて見たれば」（植歌）など。『巷謡編』・巻下・土佐郡神田村小踊歌に

「三尺妻戸をほそ戸にあけて

（3）黄金の光にも増さつた朝日が射すと讃めたる。狭義田植草紙系諸本の朝歌一番の最後の歌はすでに朝日のことをほのめかせてゐる。例えば右記の「高松屋古本」もそうだ

し、「植歌」には
「ねるといふてもまくらに朝日かさすまで

とうたつており、その雰囲気がさらに発展しているのである。他に、天正の田歌に

「けふの日ハ金（こが子）ニまさる国照てらし（ママ）

七重の雲を分けててらすてらされて

諸国の中がうけてよろこぶ……

とみられるほか、

「こがねにまさる朝日さま東山寺をかき照らす

（石川・鹿島郡・田植歌）『石川県鹿島郡誌』

「今朝の日ハ黄金にましたる朝日かな

ただいの雲をあげて照らそか

（岩手・紫波郡・見前村・田植踊歌・神歌）、本田安次氏

『田楽・風流』

（他に静岡・磐田郡・神沢・横山・四季のはやしの例は大系

頭注に引く）

おそらくは中世期から田植歌・朝歌における一類型的発想であつたことがわかる。

へ4へ 歌謡集成本と久保豊松本は次の如く、

「けさの朝日さも照るよげな朝日や

「けさのあさひもてるよけなあさひや

久保本、さも（然も）の「さ」脱。他に、

「けさの朝日へさもてるよけなあさひや（高松屋古本）

「けさの朝日はさもてるよけな朝日よ（植哥）

「今朝の朝日わさもてりよけな朝日よ（金井坐本）

「今朝の朝日はさも照りよげな朝日よ（口伝之鑑）

とあるように「照りよげな」も見られる。「よげな」は「好氣なり」の意。「cocoroyeqheni miyouru」（ペジエス日仏辞典）。ここにも朝日をあびる田人の予祝的心意がみられる。

へ5へ 東山は東の方の山。久保本も「かゝやく」。歌謡集成本は「かぢやく」と濁らせているが、あるいは田植歌においても本来「か」は清んで発音したか。「かゝやく」（上ミ田屋本）「かゝやぐ」（哥写）など参照。このオロンは

「あさひさしてわひがし山によねふる（雑紙）

「あさひさしてひかし山を米ふる（大哥双紙）

「朝日さしては東の山に米うつ（植哥）

などと「米が降る」で締め括る例も多い。朝日の輝きに空から降る米をみている。もちろんそのように豊かな稻のみのが目的。呪歌としての表現であるが、こゝにも田植草紙の文芸性の一面でもある幻想性の発展がみとめられる。

朝歌二番の諸歌について、田植歌由来書の類は次のように記している。

「一、朝式番のしきに日輪露霧霞謡ひたまふは、草木なれば地よりめだち申ていなり。日輪の初め申さず候へば日暮れしれ申

さすゆへ、人間なれば母のたいないより生れ申心なり（文政十一年書写『田植唄由来書』。塙本理右衛門本「田うゑ哥乃由来の事」も大体同じ）

「横路本田植唄由来書」では「哥の心は専陰陽男女二ツを以て作り給ふ」とも言う。朝歌一番の恋歌が陰陽和合して地へ種をおろすところを象徴するという説明のあとをうけているのであるが、田植儀礼の場における歌謡の一つの理解の仕方を知ることができ。広くこういう由来書の類を見渡すと、いくつか神道的、仏教的な説明も見ることもできるのであり、それは広く田植草紙系歌謡の歌詞とも関連して、本質の究明に必要であるが、とりあえず「朝歌」なるものは一日の組織的配列のなかでも特に神聖にして予祝的性格の強い面があることが知られる。

「朝歌はゆうにやれ朝歌にこそな

お福がさずかる朝歌に（岡山・阿哲郡・田植歌）稻田浩二・新井久爾夫両氏著『ふるさとの歌——岡山の民謡』。同類は森岡本にも。

「朝うたはヨイ／＼ななさとまでもいはひなり

きくひとまでもいはひなり（神奈川・田植歌）『俚謡集』

「あそたにや／＼七里迄の祝かな

きく人他の人うたふわれよし……（東京徳丸田遊・田植歌）本田

安次氏著『田楽・風流』。『東京都の郷土芸能』五一ページでは「アーソーダニヤ、ソーダニヤ七里までの祝かな……」とある。朝歌の意であろう。)

などの各地の田唄の断片はそれを言つてゐる。佐渡・小比叡神社の田遊式では

「けさの日は小金にたる朝日かな

七里までもあいはひかな（苗取歌）『民俗芸術』三の2

ともうたう。朝歌は昼・晩の歌に比較してより儀礼的に緊張した霧雨氣をもつてゐる。そのことはこの1番に比較的よくあらわれてゐる。

この1番は朝歌一番にみられる一連の恋歌の霧雨氣をまず親歌でうけつぎながら、子歌からオロンへと場面が朝日のなかに開かれゆく。車戸を開けて黄金にまさる朝日をながめる姿勢は、やがて歌の内容が屋内から屋外へ展開してゆくことと共に、田植習俗の場における原始的心性の一跳躍を象徴してゐる。この地盤には日輪信仰のたえざる根強さがあつてこれからも述べてゆくように田植草紙全篇にその流れはみとめられる。讀め言葉のある予祝的表現・内容において、少くともこの1番は中世田植歌としての呪歌であつた。

他に類例を他地方の田植歌にみるなら

「今朝や出る旭をば誰れもちて拌めよ

苗もよいば代もよい（『酔酒一曲』津刈の田唄）

「朝日様今朝の日は幾世に照りやる

七重の雲も別けてて（新潟・岩船郡・田植歌）『俚謡集』などを知ることができる。

さて、私はかつて「田植草紙考——語りぐさの系列をめぐつて——」（『伝承文学研究』第七号）において、この1番についてもふれ、豪奢な朝日長者伝説がその背景にあつたであろうことを述べた。詳しくはそれに拠つていただくこととして、ここには極く簡単にふれておく。

狭義の田植草紙系田植歌本から1番にあたるもの最後のオロシを、前掲拙稿にあげたもの以外で三例引くと、

「今日ノ田ぬしお朝日ノてうしやとよばれた（雜紙）

「けうの田主を朝日の長ちやうとよばれた（有久本）

などあるのが注目される。このように有力な田植歌本の多くがこのオロンをもつのであつて、この1番においても、むしろ脱落していると見たほうがよいようだ。前掲の拙稿にも引いたように「田植草紙」だけでも「一もり長者」（13番）「しゆつもり長者」（133番）「長者の門田の稻」（58番）などと云つたうのであり、其の他の田植歌本を見渡すなら各様の長者がうたわれている（例えは、朝福長者、大福長者（黒沢村田植歌）など）。『田植草紙』系歌謡を荷担する田人は、現実に豪農の長者としての田主に接していたとともに、伝承されたいくつかの長者伝説にも親しんでいたことを知つておく必要があろう。現実と伝説的世界がかさなり合う場でもあつた。朝日長者は他に、田植歌としては

「朝日長者の弟婿がさゝげまいたる手あいは

三十三さやなれとまいたる手あいは（島根・美濃郡・田植歌）

『俚謡集』

「名のれやはづかし 名のりやならず朝日長者の昔のひめ

（愛媛・北宇和郡・田植歌）『同』

また、東北・八戸地方、帆の行事（田植踊）に「弥十郎苗取初め」

があり、その内の田植歌で、

「朝のはかの千刈田の水に植えたる松は何松 次郎と太郎の若

松、一なる枝には錢はなる 二なる枝には金がなる 三のあ

がりの小枝に 黃金の花は九つ 一つとれや 八つになる

朝日長者と呼ばれた 呼ぶも呼んだし呼ばれた 朝日長者と

呼ばれた（宴席の最初に歌われる祝歌） 「おめでたい節」として

もうたわる

などもある。朝日長者といえば、豊後国・玖珠郡田野に栄華をき

わめた朝日長者の一類の話が知られているが（『改定史籍集覽』の

『豊薩軍記』卷之三参照）、そのはじめ朝日の如く栄える長者という

讀め言葉として生れたこの誇り高い名はやがて各地にそれぞれの

特色ある筋書きをもつて定着もしたであろう。田植草紙系歌謡の

長者なるものは、あるときは

「お日が出土たならわしが殿はござるう

我が殿御は清盛長者と呼ばれた（『柿原氏藏田植歌』）

の如く、清盛でもあつてその様相は雑多であろうが、それらの根底には今も述べた如く日輪によせるかぎりない呪術的觀念の世界

があり、朝日長者もそういう面から興味あるものであった。今日の田主は朝日の長者として出現したのであり、そこにふりそぐ光はあたかも天から降る光であつた。こういう儀礼の場では時としてその呪術的衝動は現実的なものではなく想像的・幻想的に發展するとJ・A・ロニーはその著書『呪術』で述べているよう、この1番でもうすでに田人の描く幻想がはばたきはじめているのである。田の神は中世の軍記物語に現われる武將的イメージで飾られ、広田に立つ田主は長者伝説の背景の上に浮び上る。それは中世という時代の民俗觀念の一面でもあり、文芸としてのおもしろさにつながつてゆく問題を含んでいる。

2 番

「¹けさうのときやまのはをみたれば

「²きりやろかすみやろ山のはをみたれば

「³きりがふかふてみせんのこしをたちまふ

「⁴あさのくもりへてろうかためのくもりか□

「⁵あめがふろうとてみせんのこしの朝□□

「⁶みのかさはおいてをたちあれあれくもかははれてゆく

〔注〕 〔1〕 以下「+」や「○」の印のついているものもある、

歌謡集成本・久保農松本とともにこれらの記号なし。

〔2〕 今朝卯の時に山の端を見たれば。卯の時は實際田植のはじまる時刻、日の出のころである。

「天ちくのとしわか水にたねつけて

まかばよけさのうのとき」（小笠原近重流）

「改まる年は若水で種をつけて

まかばや今朝の卯の刻に（島根・飯石郡・苗取歌）『俚謡集』

荒神神樂でも、神を迎えて、

「神々を今朝卯の刻に招じして

新薦敷きて待つぞ久しき（広島・比婆郡・東城町福田・荒神神

樂 牛尾三千夫氏「祖靈加入の儀式としての荒神神樂」（まつり十一号）にあげられる。

とうたう。柿原乙本では「卯の上刻」「卯の中刻」「卯の下刻」の順で朝歌がはじまつていて。卯の日・卯の刻にはいろいろの言い伝えがある。右の例からもたしかに信仰的な特別の意識はあるようである。高知県には霜月初の卯の日の朝の卯の刻に山の神を祀るところがある。また長野

県北安曇郡では正月様は正月の卯の日に帰られると伝える

（以上『綜合日本民俗語彙』）。山の神も正月様とともに農業神——田の神と一連である。東北地方では初田植を卯の日

にすることを忌むというのは卯の日の神聖さを消極的に物語ついているのであろう（『東北の田植習俗』『民間伝承』、二五八号所載など参照）。福島・石城郡では卯月八日は神の日といつて田に入ることを忌むという。其の他卯の日に関する俗信は多いと思われるが、田の神や年の神がとくに卯の日や卯月に関しているということは言えるであろう。本土で

は実際に稻の種下しの時期が卯月初旬あたりでもあり、卯月八日の信仰とも関係するであろう（新井恒易氏著『日本の祭と芸能』、第三章。等参照）。また卯の花が咲花としての意味をもつたこともあわせて考えておいてよいであろう。

なお、志田延義氏は、類歌として、この親歌から次の子歌にかけて

「朝の出がけにやま／＼見れば

霧のかゝらぬ山もなし」（『酔酒一曲』・出羽国飽田ぶり）をあげられる（『日本歌謡歴史』・『田植草紙の歌詞』）。

（3）「田植草紙」では二行目（子歌）はだいたい一字分下下げ書きされているが、ここは（歌謡集原本も）そうではない。久保本は、一字分下つてある。

上半、歌謡集原本では「霧やろ霞やろ」、久保本「きりやらかすみやら」、

「きりやろかすミやろ」（高松屋古本）

「きりやるかすみやる（有久本）

などの他はだいたいの諸本は「やら」。ろは、らむ→らう「ろと変化（大系本頭注）。浅野建二氏は「田植草紙の如く「きりやろかすミやろ」を用いているのは僅かに享保頃の筆写と推定される高松屋古本ぐらいであることも注意され。語感からして「やら」よりも「やろ」の方が古形であると言ふまでもない。美土里町本郷の砂田氏藏田植歌本に「きりやろかすみやら山のはを見たれば」とあるのは誤

記でなければ「やろ→やら」という過渡期の形を示すものであるうか」（『田嶋研究』・1号、田植草紙解釈上の問題点）

と述べられる。狭義の田植草紙系歌謡群を見ると右に見た

ように数は少いが「やろ」とするものまたそれに近いものもたしかに見られるのであつて、両語の使用が確認できる。

その点で過渡期、共存の時期、あるいは地帯といふものを想定できるかとも思うが、氏は砂田氏藏本なるものをあげておられるが、そういうたび備後地帯に近いところから出土歌本をもつてくるまでもなく、この「田植草紙」・朝うた四番の四季、にある23番では、

「きしやろたかやらないてとおり候よ
とあつて一声の内に両者を混ぜてゐる。また115番では

「馬のりは三人なりとれかこれのむこやろ
はたに地白地むらさき小たちはいたかむこやら

とあり122番も同様である。『田植草紙』のなかで両方が使用せられてゐる。他に、山内洋一郎氏「田植草紙のことば」（『田嶋研究』3号所収）でふれられてゐる。

「みせん」は弥山で、もともと仏説にいう「須弥山」からきた（『芸州敵島図絵』、卷四・弥山の説など）とも。また『芸藩通志』・十六・では同じく敵島の弥山について、「弥山は蓋御山の字、神山の尊称なるべし。さるに弥山の字を用ふるは仏氏の徒須弥山の義より改めしと見る」とある。もともと雲峯の尊称である。（以下考説に移す）

「こし」は「腰」で山の麓あたり。

「富士の腰の横雲北に廻ればふ——るとな——、雨を降らせたれやい（福島・相馬地方、雨乞歌）

（5）このオロシの最後、一字が掠れて消えているように見え。る。はつきりしないが、意味の上ではさしさわりない。呪術的儀礼の場があるので、朝の曇りさえもやがては日が照る前兆であるかの如くうたう。田人を取りまく自然は予祝で満ちている。この期待は最後のオロシでもう一度繰り返される。

（6）朝のあと二字分読めない。史料編纂所本では「きり」とあるのをはじめ諸本ほとんど同じく、霧である。久保本「朝日は」とあるのはおかしい。

（7）前半「簾笠は置いてお立ちあれ」。田植歌を広く見渡すと「簾笠は置いて」の他に「簾笠持ちやれ」とうたう型もある。例えば

「日が照ろとも 簾笠持ちやれ

篠原のいささの露は雨まさるよ——な（京都・与謝郡、田植歌）『俚諺集』

後半、「お立ちあれ」の次の「あれ」は疑問。

「みのかさわおいておたちあれくもりわへれゆく（久保本）の他に

「ミのかさへおいておたちやれくもりハはれてゆくもの

(萬松屋古本)

「みのかさはおひてたちやれくもりははれてゆくもの

(植哥)

「みの笠をおみて御立あれくもりハ晴て行もの

(上ミ田屋本)

などをみても「あれ」を繰り返す類例なし。「調子から見れば衍字ではないかもしない」(山内洋一郎氏篇・田植草紙校訂本文の脚注)ともあるが、一応衍字と見ておく。また「くもかハ」の「か」は久保本や右の諸本からみて「り」の誤写か。「曇り」はたちこめていた朝霧。

〔考説〕

まず、弥山は他に

「のふばにうくつゆわ玉こつゆかやな

玉ならばよもちきりつゆがをちるとよな

つゆかもらばやみせんのきりが

つゆがヲちざりき京のそらへ

き京かるかや小鳥ノそらね(青笛上大江子本)

ともうたわれる。弥山として注意される山はいろいろ。なかでも、

(1)芸州敵島の中央に聳える峯を弥山といふのは周知。弘法大師開

基と伝える。志田氏・浅野氏は、「田植草紙」の「みせん」をこ

の山とみる(大系頭注)。「日本歌謡の研究」所収「田植草紙の諸問題」など)。浅野氏は「山口県玖珂郡南条郷の歌に、『宮嶋の弥山の山とみる』(大系頭注)。

空の宵時雨ぬれて鹿が独り行くらんく、とあるほか、島根邑智

郡附近田植歌にも、「宮嶋に参らうや夏の六月にの、思ふ殿子と夏六月にの何と参りてみせんに上る、とあるのでやはり敵島の主峰のそれを指すものと見たい」(『田唄研究』)、田植草紙解釈上の問題忘)。他に管見に入つたものとしては、『広島県文化財調査報告』第五集に載る。

「弥山山から谷底みれば一分小判の花ざかり(宮島地方餅揚歌)がある。(2)、伯耆大山の主峯もある。これをうたうものには

「大山の弥山の寺の其内で万部のお経もよまれ(島根・飯石郡、苗取唄)『俚謡集』

「大山のヤーハレみせんのいけの御符の水ヤーハレくごふの水ヤーハレ よこくの人のごふの水(島根・大原郡、田植歌)『俚謡集』

などある。「田植草紙」では、(20)番と(51)番に「大山ふしのしひれを」「大せんかさに綾の緒」などとあり、伯耆大山との結びつき

も無視できない。また、(1)、牛尾三千夫氏によると出雲、琴引山も奥飯石地方の弥山であつたとして、同地方田植歌

「来島にはヤーハレ 琴引山をみせんとは ノンホーリヤみせんとはヨー ハーリヤみせんとは ヤーハーレきりふりか 一かるみーせん」

をあげられる(『田唄研究』5号、35ページ)。(2)、「小笠原近重流御

免田植歌本」では、

「けさをきて正崎山をみはたせば

みせんをきりがまいをろす

『正崎山こそけさのあさぎりわな

みせんをまいをろすけさのあさぎりわな

とある。(4)、また管見によると『防長風土注進案』の「三田尻宰

判」の(4)のところをみると、いわゆる山口・佐波郡内であるが、田

嶋山というのがあり、その上に「弥山の神社」(祭神、瀧津姫命)がまつられていたようであり、(4)、地理的にはやや離れるが、大和の国・大峰山の中心峯も弥山で山頂に弥山神社がある。三拜由来において大和の国はしばしば歌われるようでこれについても注

目したことがある。まだ弥山なる山で「田植草紙」と関係づけられるものもいくつかあるか思われるが、その名は、牛尾三千夫氏の言われる如く、本来は普通名詞で、その地方の信仰を集めた靈山を呼ぶ名であつたろう。ただし、広い田植草紙系歌謡圏の内

のこの「田植草紙」においては、単に山とあるのではなく「みせん」とあるのであつて、いくらかは、田植草紙としての限定性があると思われる。つまり田植草紙としては何処の「靈山弥山」をイメージしてうたつたか、ということは一応問題となりうる。「田植草紙」の諸歌から推量して、また、著名な名所をうたいこむその性格からして、それらの内、嚴島の弥山と伯耆大山の弥山がより注目される。現段階でそのどちらとも確定しがたいが、田植の場では、田人は目前の霧のかかつた山を仰いで、信仰の山、

あるいは名所でもある膾炙された弥山をイメージしたことである(5番にうたわれる「こがらす」と関係づけると、私もどうも嚴島の弥山が有力であると思われるが如何。また佐伯郡では嚴島の弥山に朝霧がかかると雨になるという言い伝えが聞かれるというが、このことは本歌の五行目の歌詞に添えてみることができる)。

ここでは弥山の腰に舞う朝霧が歌われ、1番の朝日の歌と連続している。以下述べてゆくと思うが、田植草紙ではこの1番と2番の結びつきの程度に、さらにはより密接に歌と歌が関係をもつながら発展することは、連歌俳諧などの様式をも思わせ、文芸としてのおもしろさの一面でもあることは先学の指摘されたことで、志田延義氏は、

恰も連鎖の鎖にも似たつながりを以つて連ばれてゆくことがない。かかる構成は連歌的であるとさへいへさうで、「閑吟集」の排列に用ひられた連鎖法をも想起せしめるのである(『日本歌謡史』、田植草紙の歌詞)

と述べられていることは周知である。以下、連歌俳諧的構成に注目せねばならぬことは当然である。ただその場合忘れてはならぬことは、この歌謡群が中世田植儀礼の場で唱詠されたということなのである。つまり連歌的な発展の周辺には、集団労働の社会性、呪術的観念、時代的感情の動向などといった背景を常に考えておかねばならない。田植草紙における連歌性にはやはり独自な複雑さがあるようである。つまり、その地盤や背景のうごめきのなかで連歌性は一文芸性としてうかび上つてくるべきであろう。

オロシ二行目の「朝のくもりは……」と四行目「みのかさわ⋮⋮」によつて、霧が晴れてゆき、明るく開けてゆく自然——即ち吉祥を意識し願つてることが察せられる。他の諸本、後半で

「きりはたちのくかすミハそらニまいよる」(高松屋古本)

「□□ははれ行、霧は空に舞よる」(古本田植歌)

「あれを見なされ霧ははれてないもの」(楠原氏本)

と見られるように、自然が瞬間に移り變つてゆく様がうたわれ、はれやかな予祝的氣分がつのつてゆくのを見る。田植の場における、自然のとらえ方は興味ある問題であるが、その根底にある呪術性からくるところの共通した発想の類型に注目しながら、一方に拙いながらも田人の思う美がそこにうたい出されているようである。

さて、朝霧が空に舞い上つて、そこに「風」が象徴され、やがて次の歌をほのめかせている。

3 番

「きのふからけふまでふくはなにかせ

「こひかせならへしなやかに

「なひけやなひかでかせにもまれな

「おとさしきよやうのそらのつゆおば

「しなやかにふくこひかせがみにしむ

〔注〕 〔1〕 この歌は「高松屋古本」では「ゆり」の片書きを

もつ。田植草紙の伝承された新庄ではこの歌は「ゆり歌」でうたうべきもの一つであると言われる。ゆりは特別のうたい方をする唱謡法の一つで、普通の歌よりも、文句を引き伸ばしてゆるやかに歌うもの。内田るり子氏によると「一般の田唄と異なる特徴は親歌・子歌の部分に必ずヤーレ」という囁し言葉が入つていてその分だけ音楽が長くなつてゐるわけである」と。これは、仕事田のうたい方というよりもむしろ役歌(儀礼的なさんばいおろしの歌、うなり歌など)に適応されるものという。普通の苗を植えるテンポにしては遅すぎるわけである。なお詳しくは、久枝秀夫氏「新庄の田植歌の語い方」(『田唄研究』5号、所収)、内田るり子氏「田植ばやしの音楽的研究(一)」(『田唄研究』・5号所収)、同氏「島根県邑智郡石見町青笠の「田植ばやし」の音楽的研究」(『日本歌謡研究』・第二号、所収)等参照。

「何風」の如く「何○○」とおく表現は「向ひなる差傘は何か」(53番)、「をきの田中のくろはなにくろかな」(86番)など。問の形で次の「恋風」を言い出しための準備。

朝歌一番の恋のしのび歌を思いあわせると、前半の「昨日から今日まで」という恋の情趣の流れがより具体化する。中世小歌系歌謡を広くみると「昨日」と「今日」を対照させる表現はいくつか見られるが、その多くは世のはかなさをうたうパターンとなつてゐる場合が多い。「青笠上大江

子本」では

「きのふ、京からふく風何風やらな、
西か北か南かよそハとののこいかせ
と変化している

「恋風ならばしなやかに（吹け）の意。

「恋風なるならしなやかに吹やれ（金井坐本）

「こひ風ならべそよと吹けかしたものニ（上ミ田屋本）

高千穂神楽歌では「恋風」を「神風」として、

「さよ中に綾の風こそ吹き来れ

神風ならばしなやかに（神下し、『日本歌謡研究』三号所載）

（以下考説参照）。

「ききようなひけやなひかて風ニもまれな（高松屋古本）

「ききやうなけやなびかて風ニもまれる（金井坐本）

「きけうかるかやかりてわ風にもまれた（植哥）

「きやうかる芽刈ては風ニもまれた（上ミ田屋本）

前二者はこれに近いが、後二者の如くうたう形もある。

「もまれな」のところ高松屋古本と同じであるが、「もまれた」「もまれる」とする形が多い。その方が意は通じやすい。

「そら」の語は112番にも見られるが、ここでは「上」の意味でよいであろう。広戸惇氏等篇『島根方言辞典』によると、「そら」に「上の方、高い所」の意のあることを

「5」「そら」の語は112番にも見られるが、ここでは「上」の意味でよいであろう。広戸惇氏等篇『島根方言辞典』によると、「そら」に「上の方、高い所」の意のあることを

記している。安芸地方でも上の意に用いるという（友久武文氏説）。石川・岐阜・滋賀・三重・京都・兵庫・岡山・広島・島根にまたがる方言であろう（東条操篇『分類方言辞典』）。

踊歌でも

「虎松殿の立物ハ本白銀に中金、空段々にや錢が成

（「神踊」『日本歌謡研究』・四号所収）

とあるように、本、中、中に対する語であることが知られる。

さらに島根・瀬戸郡、田植歌では

「栗の花こそナ一 空に咲いたナ一

とも歌う。ただし、これなどになるといわゆる空（sky）がより印象的に背景に広がっているのに気付く（→112番参考照）。

この行は「暗に落ちる涙をきかせる、空の零などと同類」

とある（大系本頭注）。和歌では露なるものは恋の涙を暗喩

する場合が多い。和歌の情趣をうけつぐ露の意味をみてよ

いであろう。これは後述する5番にも関係する露の意味

と対照的であつて、田植草紙では一つの露という素材をと

つてみても二面の意味と雰囲気をしおぶことができる。あはれな露と力強い露があることは、この一群の歌謡が中世小歌闇歌謡であるとともに田植儀礼の場における唄歌でもあることを物語つている。

「5」「吹く風が身に染む」の用例は志田延義氏、浅野建二氏もあげられるように

「吹く風は身にはしまいで いちじゅの詞が身にしむ
身にしまば抱いてねしよやれ」（『巷謡篇』・土佐高岡郡・
田植歌）

「宮地ほねなや塚原風が身にしむ」（阿蘇祭礼田歌）
を知る。他にこの用例は多く、

「△其それ橋にわさめうたして小なみにたいこゆらし
た 其たいこひときわたれと御板元の松風へへ

△みにへしまいて磯吹風かみにしむ」（御神浦・順れい
踊）『日本歌踊研究』四号

「松風を身にはそわんでこえ来る小風が身にしむ」（福島・
双葉郡・田植踊歌）

など。

〔考説〕

この歌は中世小歌圈歌謡の情趣をもつてゐる。まず、そういう
面からアプローチしてゆくべき歌であろう。親歌・子歌の二行に
おいて、最も近い類型は「隆達小歌」の

「昨日より今朝の嵐のはげしさよ」

恋風ならばそよと吹かな

であろう。また右の「注」の「△」に掲げた「上ミ田屋本」の例
は「恋風ならばそよと吹けかし袂ニ」の意を伝えてゐるが、これ
をもあわせてこの3番をみると、やはり「閑吟集」・②番の

「恋風がきては袂にかいもとれてなう

袂の重さよ恋風はおもい物哉

と関係していることがわかる。右の閑吟集の歌は、狂言歌謡にも
見られる。

「恋風が來てはた本にかいもつれてのふ袖のおもさよへ」（天
正狂言本、わかな）（他に、大蔵虎明本「枕物狂」「かなわか」、和
泉流狂言抜書「枕物狂」「金岡」にも）

なかでも「恋風」なる語は中世小歌又はそれをうけついだ近世芸
謡にも盛んに用いられてきたものである。「恋風」で類歌を二例
だけあげると、篠原踊歌のなかに

「御江戸船かよ浮き漕ぐは

「艤でやらいで恋風でやる」（長崎踊、中尾新緑篇『大和吉野郡大塔
村篠原踊歌』完）による。なおこれは下野敏見氏篇『吐伽喇列島
民俗誌』所収、オーニワ踊の内の「長崎船」に変化したかたちで入る
とあり、田植歌では

「ヤレ〜〜ナア恋風や野でも逢はれるが、お色男にやなかなか
野ではあはれぬ それが定だなかなか野ではあはれぬ」（甲斐
の国）『日本歌謡類従』下

とある。

「恋風」の語があるからもあるが、当然「靡く」「揉まれる」
などの語が暗喩するところを知ることができる。オロシ二行目の
大系の頭注を引いたように恋に涙する女性がほのめいている。民
謡では野の花が吹く風に靡くことで、相手になびく女性を暗喩す
る場合が多い。それをよく示しているものに『鄙廻一曲』が伝え
る、科塙の国、春唄（曳白唄）の

「いかに野に咲く花なればとて

吹かぬ風には靡かれぬ

がある。

この3番ではその花を「桔梗」と置いてることにも注意して

おきたい。田歌では「桔梗笠」がしばしば歌われ、

「娘には桔梗花傘、嫁には皿の三度笠、佐渡笠なりと買うてた

もれや來ていのう 買うてきせませう 今度の三次の市で (広

島・安佐郡、いさみ田) 松川二郎氏篇『全国郷土民謡集成』所載

「さんばへはあらたま神で馬からおちて笠をとれあぜまめが

によいと出たきゝやう笠きつれてなつはいどうやそに

やく いそいそにやそにや (讀岐國、田歌) 粟田寛篇『古謡

集』『続日本歌謡集成』卷三所載

他に「桔梗手拭」などもうたわれるが、広く民謡を見渡すと恋の霧雨氣でしばしば桔梗は素材となつてゐる。

「恋に桔梗は色よい仲ぞ

萩は寝乱れ錦の床に (東京・佃島・盆踊歌) 前掲『全国郷土民謡集成』所載

「召せや召せ桔梗の腰

桔梗はよいものしやんとして (新潟地方・盆踊歌) 岩波文庫本

『日本民謡集成』所載

などもあるが、なかでも次の例 (信濃地方) の如く女性の花、恋の花としての意味で、

「草を刈るならきゝよばな刈るな

ともうたわれ、同系のものは「御哥雙紙」にも見えてゐる。この

ききよは女の縁の花 (信濃、上杉町・吉野・草刈唄) 町田等氏編

『信濃の民謡』所載

「草を刈るならきゝよばな刈るな

ききよはおなごの縁の花 (長野・南安曇郡、草刈歌) 『南安曇郡

『草刈』卷二の下所載

「草を刈るとも桔梗は残せ

主とわたしは桔梗の絞 (諏訪地方、草刈歌) 有賀恭一氏著『諏訪の民謡』所載

とうたわれているのであつて、これらの歌は3番の霧雨氣を理解する上で役に立つはずである。つまり、桔梗は恋する女性を象徴している。

そしてさらに言えることは、右の信濃地方の桔梗の民謡が「草刈歌」であつたことも参考にして、この3番の歌の背景に、田人に身近な朝の草刈りの習俗の場面を置いてみることも可能のようと思ふ。このことに関しては積極的に決めつけることはできないかも知れないが、右の註にあげた「植哥」や「上ミ田屋本」などでは「刈る」の語も伝えていたし、例えば「哥写」では朝歌に

「今朝とふる殿原ハ馬にめされたよな

草かりに御出かヤ露にしよばぬれてな

草かりのふてハ段々山をまよふた

つゆにうたれたからふや山の笹草

なんば笹草からふも山ニ見へぬよ……

ように朝歌では草刈りのことが題材となつてゐるのであるが、

「大哥双紙」などでは朝歌一番の最後に

「むくのこうがいあさ草かりがみつけた」(同類の声は「金井坐本」)

や「上ミ田屋本」などにも)

とうたつてゐるのであつて、この3番に至つてもそういう霧囲気を感することができるようと思う。草刈りの男が桔梗の咲く野で朝風に吹かれて草を刈つてゐるといつたところで、それがさらに恋の霧囲気で象徴的にまとめられている。なお草刈歌をもう少し

つけ加えると、東北地方岩手県の草刈歌では

「朝草に桔梗と黄金刈り交ぜた」

且那様馬屋が黄金で輝くや(『惺』)

同じく津軽や岩手の獅子躍でも、朝草刈りをうたつて

「朝草はきゝやうかる茨苅交」

是の御馬屋花でかゞやく

「朝草にききよゝや小花を刈ませて」

「これの小花 花で輝くく」(本田安次氏『田楽・風流』所載のものによる)

とあるように、東日本においても「桔梗」は朝の草刈歌にしばし

ば、うたわれるものであつた。

補記

次に、本稿で引用した各田植歌本の略称(カッコ内)と御翻刻者名を記しておく。

○高松屋古本田植集(高松屋古本)、田植歌雜紙(雜紙)、田植大哥双紙(大哥双紙)、田うゑ哥写(哥写)、青笛上大江子本田植集上大江子本)

↓以上五本は中世文芸叢書『田植歌本集』による。○刈田村本御哥雙紙(御哥雙紙)、小笠原近重流御免田植歌本(小笠原近重流田植歌略本)

(略本)↓以上、牛尾三千夫氏翻刻。○大毛寺叶谷本田植歌双紙(双紙)↓以上、友久武文氏翻刻。○田植由来記并ニ植哥(植哥)、金井

坐本田植歌之卷(金井坐本)↓以上、湯之上草苗氏翻刻。○上ミ田屋

本田植歌集(上ミ田屋本)↓以上、久枝秀夫氏翻刻。○有久日本田植草

紙(有久本)

↓以上、山路興造氏翻刻。○田植草子口伝之鑑(口伝之鑑)

南方村本郷植本家本古本田植歌(古本田植歌)山県郡千代田柿原氏

藏田植唄集(柿原氏本)↓以上、新藤久人氏翻刻。○文久式年写阿哲郡

森岡本(森岡本)↓以上、竹本宏夫氏翻刻。

(昭和四十二年十二月)

付記。かつて『田植草紙』(東京大学国語研究室蔵)の披見について

ては、小山弘志先生、北川忠彦先生のお世話になつた。厚く御礼申しあげます。